南總里見八犬傳 第九輯 巻一上下

特 1曽4
600
272

600
272

南總里見八犬傳第九輯卷之二十一

東都　曲亭主人編次

第百五十回　照文二書を捧て東籓に還る　兩侯衆議を聽て京信を寛む

再説一休和尚名は宗純紫野大徳寺の宗曇花叟の嗣法ゆゑ出藍の才弥高く禪機悟法は長るゝよりは世に誌るゝあるべく人の知る所く或は這活佛は後小松天皇の御落胤なりとをもく自恣にして敢權貴を避ず奥は儘きれば朝野に遊びて衆生を済度し奥盡れば深く熟睡して坐禪の床に在り年歳既に幾臘を歴て教化も倒に煩しくやありけん近曽は錫を汗陌に曳とも安ぐらしは日甚しき風の吹たゝ獨突然と東山殿を訪まゐらけるに義政公は閑雅を宗と好たまへば至るとゝふとも屈請あらざれば一休和尚の

伺候者を欽びて、ねんごろに珍客あれども、躯く閑室ゆく對面あるひても親炭を
接ぜ茶を薦めて、清談ふ時移る程ふ一休ふ坐右る劉軸の虎を見て、その
画ふ頃日甚く風聞ある金岡の筆ふ似て、亦義政公も倶ふ劉軸を
見て、原来事皆少知れる然ども又今ゆふ詳ふ告ふ及ぶを嘗ふ酷く
暴出く洛内洛外を騒ぎる変化ふ即是ふ我が画虎の来歴ふ就て疑ひ
思ふ義ふ初巨勢金岡が這虎を画ふ時倘其眼ふ點ぜる、ば脱出ると
あるべしと、胡意點ぜざるとへば、金岡既ふ未然を查して後ふ薬ふ成ずとあるべし何
ど鋏鎌子を画ふ添て緊く這虎を縛ざりけ。當時眼ふ點ぜざるとも後の人
筆を加へて暴出ふ至りて初金岡が用心も竟ふ其甲斐なきあるぞ又意ふ
初這劉軸を辰巳の巽風ふ與る那妖麗の仏童ふ甚る者ぞ或ふ云他ふ其
師の十二神将の第三る寅童子の化現るべ、或ふ云狐狸の変化るえと皆

推量ふ、明證る若果て那寅童子の化現るべ、ども、ア人の巽風ふ這
画を授けて後の患を釀る倘又狐狸の所為るべ樵六とらしが狙撃し時
いふ、ちく其銃頭を免ぐ、ふ我是ものふ疑ひある智識の教を
受ず欲を惑ふを釋ね甚麼ぞやと問れて一休ふ領ず其疑ふ君の
ふ、ぞ世俗の訝り思ふも大くふ其頭ふ、ぞいふる世ふ妖怪変化とふ、ふ、ふ狐狸の
所為欣然ふ、ねば人の冤鬼の、然ば真の妖怪ふ形ふ、ふ像る、壁言ば雨雪の降る
が如く突然と、く顕れるも滅息まるふ及ぶ、ふ誰ふ其迹を見る、ぞ鬼神
二氣の良能ふ天ふ在りて日月星辰地ふ在りて行潦河海七十二候二十四
氣の迭代ふ行るふ則天地の変化ふ抑氣候正順るふ則是天地の経
ゆく不順る、ば天地の変と、其不順ふ方りて五穀登らず疫厲流行是
其変化の大なる者ぞの餘ふ人の招く処或ふ禎祥と做り或ふ妖孽と為ると

あり。亦それ外典の教にも國家将に興らんとすれば禎祥あり。國家将に亡んとするときは妖孽あり。蓍亀に見れ四體に動く。禍福将に至んとすれば善必先之を知る。不善必先これを知る。故に至誠は神の如しといひけん。我内典に所云縁業輪回因果応報の理り亦是に相同じ。在昔宋の徽宗帝は書をよくし畫を能し詩文琴棋雜伎遊藝に巧なりといへども只國を治るに拙し。それをもて賢臣を遠離く佞人を親愛し。剰風流を事として名花奇石をあまた集合るが為に是を千里の外に求る運送に財竭え民傷ぬ。其費只億兆のみならず。この故に外寇(金兵)屡境を犯して賊民(山東の宋江及方臘の類)も亦あまたあり。遂に宮中に妖孽起り。黒眚夜々見るに及びて是に觸る宮嬪の即死する者尠からず。竟に國亡るに及びて那身は父子共俱に金國に拘れて旅魂夷狄の鬼と做れり。亦悲しからずや。那黒眚は形狀牛に似たり。最黒ければ分明くこれを見るものなし。今の世

瞳の畫虎妖も亦那宋の黒眚と日を同くして語るべしといと憚りある事なれども。拙僧直言仕らんに、およそ御心を推鎮めて聞召せ。君も亦只風流をのみ年来旨と為給ひて狗を愛し貨を弄び給ふ故に民の父母たる國政に疎るは甚麼ぞや。この故に応仁の内乱起りて官庫の史傳諸家の舊記は兵火に隻字も残る者なく故典倦らず做るのみか君は名物の茶碗一箇を損ひ思ひても做しなまし。猶奢侈は弥増て茶に耽り奇を好ませ給ひ珍器を玩び給ふ一器の價を問ふときは萬銭萬々銭も足れりとせず。遂に先君鹿苑院殿(義満)の顰に倣せ給ひて這銀閣を造営ありしより民の膏腴を絞り盡して京師は野邊に似たれども尚御心は足らぬ幸にして當将軍(義尚)は賢明にておはしませど君が驕樂に懲ずして只奢倹を素と事として乱を撥め残に克ぬ思欲あると深切なるも大乱久しき後なれば物に力足らで諸侯朝せず權臣は尚恣にして故の如し。それとも君は蓋なで只

茶法ホのミ故実を正し。諸侯の順逆を尺入りのるぞ。拙僧在茲恐るゝ事あり。
後世も亦富貴の家豪民の子弟ぞ。義尚公の賢明ゆゑ。倹素ホ御坐ゐるゝ。
ヨヲくハ知らぬ。知れども思ひぞ又只君ガ類軍ホ倣ふく茶と嗜むも嗜まざるも故くて給ガ
な元東西とのミ貴びく。是ハ東山殿の御物ゑ彼ハ義政公の御批の形ゑるゞ。喋々
ゐく其奇ヨ誇く可惜銭を費せども猶飽ぞ甚し元ホ至りてハ産を破り職を
喪ひ民叛元囹圄ホ削られ幸ひホ一七亡ざるも。訓りを又後ホ貽す者必無とまべうぞ。
茶盞茶の湯ハ清貧閑雅の小集人田ホれ乙まれ有ホ儘せそよく是を用ひて七。
茶人の本意とハ元べけれ。然るを高閣臺榭ホ美を盡し。ゆゑ元貨を弄びて志を
失ふを閑雅の真面目とハ元べ元や。昔より壽元君這驕樂をもて。後の指南ホ倣ふ
ふべ元珎器奇石。花卉故書画をヨヲく集合く民を傷るを尚飽ぞ思召さと。
既ホ年来ゆるゝ。民の怨と鬼神の怒りの甚ふ昏くホ相蘊りて。那妖艶の仏童ホ

変り又元瞳の画虎と見まく。世を蔵め人を驚ーたりけるを尚暁得のるぞ。
反く那仏童の出処を訝り。且虎の眼ホ點せざりける用心を詰りのふハ。醉の中を
醉ホ七迷ふが上の惑ひ夫以まべ一切衆生の眼ホ瞳元が如し。
ゐをのく書を看れども。文義を悟らぞ。是を名つけく文盲と云甚し元ホ至
てハ一字不通の無筆ホり。是より下ハ玉と石と菽と麥とを分別せぞ。視れども見
えぞ。指せども知らぞ。是等ハ眼ホありるがら眼の用を倣ざる者ゑそ。よく思へぞ皆瞳
子ゑ。豈只這画虎のミを云ンや。ホの故ヨ内典ホ般若をのく菩提の一義とも。
般若ハ即大智慧ゑ。智ハホのづくホ知る弋ゆく。慧ハ即悟るの弋ゑ。又外典ホ
無明の醉の醒ざるゑ。家々と七未見ざる。狗子の如し。とハ云も是ゆり君ハ俗ホ云
物数奇ゆく。新奇を好ミゆゑ。且珎器故物の御鑑定ホ御眼力も富ゆゑども。
民の憂の見えゆゑ。瞳元元画の虎とのミ怪ミゆゑハ是も亦御惑ひホ陥るぞ。

這丘瞳の画虎ゐ人其眼ゐ點せ〜より。忽地ゐ眼出さく。世の人を恐嚇せ〜玩。
よく思へば相似るゆゑ。譬言ば本性奸佞ゆく。且邪智ある者。或い亦庸才な
るも。愚ゐ漢学〜て眼其用を改もと。況ん心高慢り已ゐ惚さ。博ゐ誇り。俗を欺
く。利を貪ね名を窺ぶく。友て身を脩ゐ心を正さく〜。家を成〜。道を行ふ真れ
学問ゆく疎ゆく。只世俗を非と〜賤めく。身ゐ是魔界ゐ在ると思ひぢ。甚〜況ゐ
至りてゐ乱を起して刑せられ。衆と事ふく兵せらるかくの如く白物の悪名を貽さ
如況ん瞳子るゆり〜這虎の眼ゐ點して。遂ゐ那禍事を惹出せ〜と。亦年を同くを
論ぶべ〜。嗚呼造化の小児の段云如。禎祥も徒ゐ呉らぢ。妖孽すも徒ゐ起ら
ぢ。事勸懲ゐ係る所。誰ゐ這深意を知んや。是ゐ由くこれを視れば。這虎実ゐ
巨勢金岡の肉筆るや。神明佛陀の霊画る歟。人も知らぢ。我も知ぢ。知
ゐを強く説を做して。原故を究んと欲まるゐ。是惑ひを蓋虎の猛悪るも。瞳

るければ。人を傷らぢ。人の性の美〜らぬも。見ぢ知されば。倒ゐ易ゆ。然れば聲者。
反く真眼の俗ゐ勝りて。富戸ゐ博識ゐて。家を奥まも。尠らぢ。眼目の資
助ゐ人ゐよるべ〜。君果〜て。妖艶の幼童の出処と。瞳子の虎の画工の用心を。知
まく思召さるべ。君ゐ年来の御行状を。省みゐまくとる〜。疑ひゐふとりと。席を
拍ち面を犯して。已忠憚る所る。談義数刻ゐ及び〜。義政公ゐ愕然と。醉ゐ
如く醒ゐ如く。且怒り且羞く。黙然〜ると。半晌許。熟と克思へば。智識の教
化至妙ゐ〜て。是ゐ優る鍼砭ゐ〜と。思ひ復〜ゐ怒を醒く。一休ゐ向て。感
謝ゐ堪らる。宏論明辨。老和尚ゐあらざりせば。我を。よく諫るゐ。犯してかくの如く
言を盡さんや。是則我ゐ為ゐ釋氏の比干と。覚まべ。珎器故物を。排斥けく。奢
侈を省け。倹素を宗とまく。の。痩る民を肥え。然るも。這丘瞳子虎の。菊
軸を。その。尽後まで。在らせらべ。好事の者又眼ゐ點して。復禍を惹出さん。欲られも

亦料りかたし。ちもいふてくよろこんや。と問ふて一休笑ひて君御志を改めて道ふ稱せゆひ。這虎自然と滅却く復少しとゐ。あれども正可よ往方を見のむ。猶御疑ひを送ふ似り。這虎筆下の墨迹ゑれども既ふ是狀體あり形體ある者法を听く成佛せむとふ。いでく濟度仕むと答て軈く拂子城含く。身を起して徐やふ南軸の虎ふ打向ひく。則偈を說く道く。

噫王眼木佛。無學之人視而不讀讀而不通勿笑無筆與文盲水母無眼鰕子技之多目鰻鱧眼不爲用江湖億兆賢不肖誰知無眼之勝於有眼汝元來是何物也筆下墨迹無瞳畫虎狡兒點眼忽說世神童射睛則入絹妖乎怪乎神乎鬼乎一來一去休索出處人面獸心人非人獸面人心有此虎造化小兒多機關以心傳心

是偈句不押韻便是倣飜譯佛經之例云

不立文字寫眞寫生畫亦非也有像無像本來空鼓腹管心無一物苦海愛河迷孰之深一盲導衆盲彼岸遠群犬吠於聲此岸闇中流風濤不可涉迷悟在人豈有千女耶今我採一炬以爲烏有始可與入無爲也喝と說

訖く一息吻と吹かくれば其息忽地心火と做りく虎の画幅ふ移ると見えけは那時遲し這時速し。南軸ハ立地ふ燒亡く。軸さへあらぬ。義政公ハ吐嗟とだらふ見つ歎驚ふの程ふ一休早く坐ふ復りく義政公ふ稟まう目今亦肉せどく理納那虎を教化して既ふ是ふ爲ふ入り如誰ふ又眼ふ點して世を開ける由あらんや願ふハ愚直の諫言を後々までも忘れゆで費を省て儉約を旨とく民の塗炭を憐ませ怪異是より滅息く鹿を走らを悔ゐ。とべ。稟えとハ只是のみ做べも做し果つ身の暇をゆるべ。とひく軈く身を

起して。飄然とゝく退りけり。義政公は又その一奇に呆れて一霎時忙然とうち見送りぬる程に。忽地に心づきて。御後方に侍りける。近臣熊谷猿三郎直次一色駿馬幸通等を召とゝ云ふ。若們いかに思ひけん。那一休は隔昨歳（文明十三年）の冬十一月正しく遷化の時えありしに。今亦那身きに来て。我を諫めて成るべきゆゑ。夢欲現欲怪しけれと。訴りのべ直次幸通言語奔一稟きやう。臣等も亦那和尚の宏論明辯を。憶ひ聽聞仕りて。隨喜渇仰の思ひを做せるに。遷化のゆゑ心も屬ぬ。仰ぎよりてよく思へば。実に世を去りぬ。今茲は既に三稔に及ぶ。余は近曾樵夫あり。洛外の北山ゆく。一休和尚に逢ひぬと云ふ者のひとりを。虚説なりと思ひに。原来那和尚は今尚死なで在る欤。ゆゑ。義政公は。然りとて。と頷ぎ。其言思ひ合せるゆゑ。往日我語次に博士に槐雅久に問けり。唐山ゆく仙術を学ぶる者。死ぬる及びて実は死ぬ

悄地に柩を蟬脱して。深山幽谷に。躲れて人間に還らぬあり。是を名つけて尸解と云ふ。仙者も亦その事あり。達磨の如き即是。在昔菩提達磨は流支三藏に毒殺せられ。遷化して三稔の後。魏の宋雲が使を奉ゝ。西域に向ける帰路に葱嶺ゆく。達磨の履一隻を携ゝ。翩々として来ぬるに逢ひけり。師は那里へ去ぬるや。と問へば。西域へ還ると云。且汝が主は既に世を厭りと告て別れ去りぬ。宋雲本土に還るに及びて。明帝は既に登遐ぬ。孝莊位に即給。孝莊達磨の事を問ふ。怪しと。墳を啓けて見るに果して。那身は在ぬ。一隻の草履あり。と云ふ。その時は高僧傳及傳燈録に見えぬ。と。少ゆゑ。其後達磨は入東して。權且我邦に在り。聖德太子と贈答の歌ありけり。片岡山の飢人は達磨の化現なり。と云ふ。這小説は載て虎関が元亨釋書に在りとぞ。ふる是に由て。これを思へば。一休も亦尸解ゆく。遷化は実は死せるまゝ

身は猶大山に在りるごとく。京師のなをよく知りて。我を諫めて惑ひを解け且霊画の虎を焼化して。奇を好む者の眼を空に口を鉗めて。疑ひを後にわらせ。その善巧方便顧れば寔に尊し。又権者の心火を燔くなも先聖あり。在昔釋迦の徒弟加葉仏は西域二国の闘戰を和解るに二国の王聴ざりければ加葉は河上より身を飛して雲に騰りて則身より火を出して自焼して寂を示して。其常迅速の理を諭せりば。其二王懺悔して。伏せて和睦して二国の民幸ひに命を免れりと云ふ。甘甲僧正の茶會の餘談なりけるを。今又思ひ合せて。拾と云恰と云権者の慈悲も方便も量省れば我が年来の愆を悔いけれ。恁もあらん狂。さのみまぐ世の夏ひなと忘れ草。今我上にいざ擂て見ん。とうち詠じのふを直次と幸通も倶に額を働に感服して。御歌いまうまもけるに御意の趣寔に尚當文

古の義政公の歌は後太平記に載せると大同小異なり彼併見るべ

事に疎に臣等まで。御教諭によりて。疑ひの挾霧は風の拂ふが如し。好学向を仕ふと稱賞せば義政公も快げに合笑く。霊画の虎の亡るに愛惜の念ひ。なりけり。休題更説。是年安房の稲村の城内に在り七月の時候京師へ使を奉りける大江親兵衛蛋崎十一郎及姥雪代四郎等が三河の苛子崎に。歌舟を設る折海賊對治の事の顛末は親兵衛並に照文が伴當直塚紀二六をして。既に恕あり。且紀二六も又主の迹を慕ひて。京師へ赴くより後の事は久しく信ずべれば。知るよりもなるべし。秋も欲盡るに時候獨延蛋崎十一郎照文が暇兵五名と伴當夫役を領して歸舟。安房の洲崎に着しるに照文則稲村の城に参上して。京師の首尾を申上げ且君侯義に拜謁して。宣旨と御教書を渡して。猶且大江親兵衛は管領政元主に抑留られて。倶に還ることを得ざりしを生きるに義成主

八犬士姓氏勅許の紀文就て照文賞禄を賜り、大笹の共侶に西侯に拜見の処

毛吐　道節　小文吾　ひろふさ　現八

ひろふさ　信乃　荘介　大角

驚怪ゆゑ。あらくべ徑ゐ瀧田へ參りて早く老館義実へ告なれとくいそがせゆへ。照文隨即瀧田へかへり參りて義実主ゐ告なる。その言異るべもあらねば言省く具ゐせど。約這一椿事へ只照文の口狀のみるべ。親兵衛ゑ書あり。又七大士と大毋妙真を慰る消息ゆ。その時ゐ届ゆ。義実主ゑ首ゆく。妙真音音曳ゑ單節ゆ。七大士も俱ゐ眉を顰て。胸安かるべ思ひけり。是より第三日ゐ至りて。瀧田の老侯義実稲村の城へ来臨あ。ゑの義昨日より。その守えあるべ。両家老東六郎辰相荒川兵庫助清澄並ゐ杉倉武者助直元ゑ奉りて。郷食応の准備あ。ゑの日。犬塚信乃成孝犬山道節忠與犬川荘助義任犬村大角礼儀犬田小文吾悌順犬飼現八信道犬阪毛野胤智へ、大法師と俱ゐ召れ。各ゑ公服を整て。辰牌より伺侯へ。又蜑崎十一郎照文も召れて

瀧田の者侯ゐ從ひまゐりて。ゑ已牌時侯ゐ參ゆけり。低而両侯義実義成同席ゆ。辰相清澄ゑ奉り。則、大と七大士を召よせけり。登時義成主ゑ仟の一僧七士ゐうち向ひて。今番願ひのまゐく。八犬士の氏を金碗と勅許あり。且宿祢の姓を賜ひよりを宣示ゆへ。辰相則宣旨と御教書をうち啓ゑ聲朗らゐ讀聞へり。且其二通の寫本を。大と犬士ゑ遞與へけり。當下七大士ハ俱ゐ謹て拜聽ゑ訖て。一様ゐ席を避けて。両家老辰相清澄ゐうち向ひて。欽びを稟ゑゆ。尚親兵衛ゑかへり来ゆ。今ゑの席ゐ足らぬ所を。送憾くゑ思ひける。ゑ中ゐ、大法師ハ口へ唯々とのみ言兼あり。七大士と共侶ゐ遠侍へ退りけり。低て又義成主ゑ。蜑崎照文を召よせて。郷高ゐ上京の使首尾宜く正副両役を兼帯あり。遠ける水路の障りなく。かへり来ゐけるを。特ゐ大義ゐ思召て。其勤功を誉させ時

服二襲と黄金二十枚を賜りけり。既ゐ〻く時移りゐければ。席を更めく。老侯ゐ郷饗饌を羞めゐ、大召れく。相飯さう又別席ゆく。照文ゐ酒飯を賜ふ則七犬士を相飯ゐせうるゑの折も亦犬士等い親兵衛ゑ一人欠くるを言ゐて乞さゑ。各各いと慨〻く思ひけり。恁而饗饌果〻ゑば両侯い閑室ゆて稍久〻く密談あり。其後又照文と七犬士と、大法師と召さゑゆゐ、大ゐ既ゐ退りゐと雖ども俱ゐ微笑ゆゐ累て召も返さゑ。照文と七犬士ハ躰く亦見参を當下両侯い先照文ゐ京師の光景及政元の人と為又犬江親兵衛ゑ先見遠慮の言の顛末及姥雪代四郎ゑ情願其甲斐あるゝと苛子崎のゆまでも語らせく。听ゆゑと半晌許。其言果く却親兵衛を請返さゑ。便直を七犬士ゐ寺ゐ同ゆゑ。道節答く。ゑの美い臣等も故らゐ胸安〻ぎゐへ昨日終阳額を哀ゆく。商量仕りゐゐ丞

ゆいせん術るゑゐゐ似〻りとゐひつ備をゑゑゑれゑ。信乃ゑらゐゐ。言ゐさうゐゐへども。親兵衛ゐ亭くるゐ所正ゐ仁の上位ゐ在り。誠や孔子の大仁ゑるも。陳蔡ゑ厄ゑるゑとゐひゑ。其儔ゆいゐひども。我們七名浮浪六年。百折千磨の艱苦を嘗て。竟ゐ天日を見る。今の栄あり。獨親兵衛ハ同〻くゑ。他ハ衆兄弟ゐ援ゑ〻。厚く仕まつるゐ及ひく。小厄あり。妙椿狸児の妖術ゐ中られく。御疑ひを受くゝも幾程なく召復されく。素藤對治の全功成り〻ゐ這回も亦上京の御使を速ゐ成〻果あく。障りなくゐ参らゐ。ゑの福餘りあり。是則天理ゆく。盈るを虧ゆゐゐんとゐへば荘助も亦ゐゐゐ。臣等偽聞ゐ縁精〻ゐ那管領ゑ台命を佯唱ゆく。親兵衛を豪猟ゆるゐ口い其武勇を愛るゑの故のゑ害心あるべゐゆゐば。厄の解るゑ候せゆゐゐ。ゑとゐを小文吾うち少く。外侄ゑく。臣等ゐ及ゑゐ。親兵衛ゑ神々ゑゐも。仁

義の外いかぞ。非如政元主他を最愛こく。則食ふ大禄をりく。係
ちく欲ぜるとも他いかゝく开を甘るひて。二君ふ仕る者るこん。ちの爰ら御心
安ろべーとらふを大角諸るひく。臣ら愚意も異ろとそ。昔者前漢の
蘇武が如れい。胡國へ使ーく。拘ること十九年。厄解く還るふ及びく。麒麟
閣の功臣ふ數きくられうと云故事さへ思ひ比べいふ。今の親兵衛い同ぐくら
ぞ。京師よ淹留両三月。いまぐ久ーれふいかぞ。恁禀せび薄義ふ似れど。鳥
だも籠中る友を慕ふ。周公且ふわゝぞとも。誰ら兄弟の急難を悲ぎこん。
心の憂愛の忡々たるも。よく思へば時を俟ふ志ぞ。窮達時あり。得失い命ふ縱
那身を。水火の中ふ置るとも。親兵衛い。恙ろ所ぞれ。霊玉の神護あり。又曉
雪代四郎直塚紀二六ら。の。封助るれふいかぞ。其窮阨蘇武が十九箇年ふ
似るべくもいかぞ。とのへば現八その語を継ぎく。臣ら只い那威勢を憚るふいかね

ども。実ふ為を生ーぐれ。意味ある故ふ右の如ー。昨日衆議仕りーも大槩ら
是ふ過ぎぞ。然とも猶御心許ぐ思召さび。間諜児を遣ーて。那里の要を
探ーゆふ御計ひもあるべれ。欲便りを為ぐ。欲ぐるふ。ちの外やいべと異同様ふ
議ーけるを。両侯つらくうち呼ゆひく。義成主宣ぐう。現間諜児の一係い
那里の吉凶を知る捷徑ゆく。徒よ物を思ふんより。慰るよりもあるべ。但
毛野い智嚢の呼えあるふ。今一言も出さぬい另ふ思ふよりやあらと。問きく
毛野い。額を衝いく。不吾臣ら。も亦前條ふ異ろべくもいかぞ。遽莫間諜
使の一芸い便りあゆよ似くれども。陸ゆい処々ふ新関あり。水ゆい亦風濤の
障りあーとそべくぞ。往復坂東道。六町一里九百里ふ餘りぬる。京師の機
密を探るとも。其使翼あるゆわゝぞい。今日出ぐ。明日告ぐる。術あり
べくもいかぞ。加旃事ふ觸く。京家の人ふ知れるべいく。親兵衛が還

るべし路絶て。且御為ふ妙ならぬ。ものあるべし。欲料りかくり。然るを今現へ
件の一説ふ及び。ハ是已上を沼ざるのこと。他ゞ本意ゆゑ。とふを義成
うち沓ぬひく。去りべ今亦いかせんや。と問れて毛野又稟を。沓羨りひ
ひ。昌義ふ素藤を征伐の日只寛の一字をして。御方の士卒を損ふとなく。
全勝をなるひけり。賢慮を仰ぎなるふ。這回も亦寛の一字ふあくとへは
べし臣ら今朝も周易ふ憑りて。親兵衛ゞ歸國の遲速を。悄地ふ考
ひ。ふ遲くとも年の内ゆハ必や信あらん。姑且閣せゆとふ七士一致の外
るけまべ。側聞せ。照文も理りんとそ稱えける。ふの時まそも義実主ふ。默
然と沓果て。義成主をそなへて。安房殿も同意るべ。我親兵衛ゞ還
るを俟へと。一日も千秋の思ひられども。せん術なを爭何りせん。とひて嗟嘆ふ
堪ぬハ。義成主ハ云云。とひと正首ふ尉めて。別説ふ及びゆひけり。

第百五十回　七犬兵を煉り夢想三使を遣る　定正將を連て水陸大軍を起す

姑且て義成主ハ又犬士ら向ひて。親兵衛の事ハ各一樞の意
見ふよりて。再説を寛くまべ。我又別ふ思ふ。昌義ふ素藤伏誅の
後封内安ひ。ひくれども。治ふ居て乱を忘れざるハ。古今良將の小心る。
矧今戰圍の時ふ當りて。一日も燕居をべきを。安房上總下總是他
州ふ勝りて。稲穀の熟早けれ。十月より正月まで。農夫们皆耕稼ふ暇
あり。教ぎて戰ひむ。是足ぬ事るとハ云經文ある。等閑ふ。よく思ひ
後悔あん。既ふ初冬ふ幾日もあらず。宜く民ふ水陸の閉戰を習ひべ。
ふの美上總の諸城主ハ。徇不て促ひて。當國ハ汝ら七名七隊ふ備
へて民を教へよ。然れども隣國を憚りあれ。陸ふ獸猟をりくまべく。水ふら

漁捕より假托くの義を行ふべき者也諸事い異日沙汰あらん先よく
その意を悟よかしと示しゆへ信乃道節毛野荘介大角現八小文吾等
皆共侶ふ稟まう臣ら當國より召よせられしよりもるるとなく素浪し
可惜光陰の過ぬるを本意なく思ひいりより偽る仰を美まられるを素
より願ふ所ふ行ひ但し摠大将出きざいの諸民始より信服せざる足の如
く使ふべき進退輒くあべからざるの義い什麼と問まるを義実主ちゆて其
義も安房殿主張あり其習陣の都叔曾ふ太郎義通あるあべ他い童
年十一歳尚成人ふ至らねども今より諸彦と師とし学び後の裨益ふる
ゆるけんいらで宜く教てよと負こゆへ犬士ら阿と応々額を働とその義い
臣ら いふして及ぶべきふゆるども辭しまらず不忠ふ似まう左ゆも右ゆも犬馬の
力を盡して仕まらんと異口同様ふ言義ふ義成主も執ひて餘談ふ及

びゆひけり。語次ふ道節ふ向ひ既ふ知せゆふどく扇谷定正主ふ臣ら故と
主の寃家なれば今茲の春正月廿一日ふ義兄弟ら資助を仰て聊怨を復
あらん折信乃ふ五十子の城を拔ける奇功あり其後又料ふも犬江親兵衛が
倶しくと云那河興佐太郎政木大全孝嗣の事もいへば定正主羞怨
ふ臣ら住方を悄地ふ索るゆもいれ井を怕てふいるども這枝桑の
二國ふ是東南の一隅ゆく隣國の虚実を撈り易くもいそ間諜を増て
毎ふ那地ふ在めゆ必便宜ふいれんといへば小文吾も亦ふ下總市河の舟
長ゆく犬江屋依ふと嗚做を壮佼ふ親兵衛が親山林房八の迹茂繼
ふく今も猶那里ふ在り井が妻水澪ふ妙真の姪ゆく夫婦共ふ其本性
老実児でいへば曩ふ他ふ訪来ふける折件の一義を耳ふ示ゆ敵地の拘束
充ふ他い河船を乗走らして武蔵下總下野ふも迚ふ処ふ著ふ

いへ敵の秘密を少知るゝ便宜間諜児ゝ勝りく。謀り易くやいなと告
まゝ義成主うち少く。開ゝ亦寔ゝ便宜の少し我も亦那管領の境を犯さ
ゝあらん狡と思いざるゝあらざれば。這回の山幸海幸も其頭の非常ゝ備為
ゝ。我よく間諜児を使へば敵も亦間諜児をもて。我虚実強弱を探らもる
とあらるゝ。然れば武を耀し戍を固くし。且仁政を宗とし。地の利と人の和ゝ
据ゝば。大敵も亦怕るゝゝ足らず。然るゆゑ。那河鯉の改木孝嗣及次園太
郎三とやらゝ。鄙ゝ入水の少えあり。他们ゝ素藤伏誅の時大江親兵衛ゝ
従ふゝ。軍功あり。と少るのゝ。左右川の厄あり。見るよりもゆくゝ有りけるゝ。木
便ゝ。そとやらゝ憶ゝ嗟嘆あへば。道節荘介小文五郎ゝ慰難く惆
然る。信乃毛野現八大角も未見の士卒を忘れゆゑ。言今他们ゝ及ぜぬ
ゝ現良将の仁慈博愛ゝの君ゝゆゑ。誰ゝあらんと思へば倶ゝ敬服して。その

欽びを稟けり。慥而餘談も果しく。照文ゝ休暇二十日の勤労を賜ふ。
七犬士と相伴ふ義実主ふ倶しまゝ。日暮れて瀧田へ還りけり。その日の衆
議を伺ふ。妙真音音曳ゝ単節号ゝ親兵衛ゝ安房代四郎の上左ゝ
らん右ゝと思ふのゝ心有繋ゝ慰難く。只音耗を松の戸ゝ葛丹葉ゝる秋
晝て。廿又稲月ゆゝるゝ。慥りし程ゝ有司们ゝ人馬調煉の下知を沼て安房
四郡の村正と荘客ゝ徇伺へば。水陸共ゝ准備あり。山ゝ假屋を構へ。且鹿
寨を為るゝゝ。又浦邊ゝヨメく漁舟を取て。楚國の競渡ゝ擬せしゝ
たり。安房ゝ春寒く冬暖るゝ。然るゝ十月ゝ小春と唱て。暮春ゆゝ優
ゝ日和多ければ。那宋人の不亀ゝの某を。呉客の徴めし水戰を呈次ゝ。
馬を泅せく海を渡り。船を競へして先を爭ふ士卒ゝ。聚合ゝ小
程ゝ義通御曹司ゝ杉倉武者助直元田税戸賀九郎逸時苫屋

七犬士海邊ニ水戰を教煉を

八郎景能等勇士都て十數名。雜兵五千餘名。皆共侶に従ふ件の浦邊に出れば七犬士も。俱に武器を救へ馬に跨り。伴當を領て參ぜる。そが中に水戯水馬は大阪毛野犬塚信乃犬田小文五犬飼現八特に勝れたる人の視を驚かすほどの。又犬山道節犬川莊介も亦拙からぬ。獨犬村大角は下野に成長りしかば。水戰に疎からしかの時勉て習得て。敏く其技を能しけり。既に十月も二十日あまりに成りぬ。時候。水戰の調煉果しかば。直元並に七犬士等は。又義成に倶しまつりて。山野に出て獸獵を。義成隊下知をなすに。昔唐山なる湯王の雀羅をもちて小禽を捕るに其三方を張て一方を張らず。入る者は入れ逃る者は逃げよとのたまひしとぞ。是仁人の做を所。必かくの如くなるべし。然れば今番の獸獵は是軍陣の習学なれば。必獲を貪りて。益の殺生をせざるべし。猛獸の

工藤景光を或は下河邊行光に作る。東鑑を正しとせべ

人を怕れ逆来るを射て斃すとも。逃るを赶て殺せざるべし。但生拘べ。第一なるべ。或は又傷るとも。殺さざるを其亞とせん。在昔建久四年五月二十七日。鎌倉の右幕下頼朝の旣獵に工藤莊司景光は山鬼の大鹿に遇見まつりを射て出ゆく。那身は果は疫死けり。鑑是を思ひ。おのれと言叮寧に試めるに。七犬士及直元等も。倶に感服して。昔は違ひぬ。士卒並に列卒は。彼へ。其殺伐を制めて。然るに七犬士の射る所百發百中なるも。猛獸は其四足を射て滾して。是を列卒に生拘せ。然るに故らに。あらぬ毛屬は或は其尾を射て隕し。其耳を射斷るのみなれども。諸獸小大とて。并て其弓勢に駭怕まつて走るに。阿容々々として生拘るもの。日毎に數十頭へければ。直元逸時。景能等は士卒の武藝ある者も。皆七犬士を師とし習ふ。敢殺伐を上目とせず。然れば其の時義成主復下知

○文溪堂藏

○文溪堂藏

なく。人を害する豺狼。稲穀を暴す猪鹿に飽まで喫せて筏に載て遠き島嶼へ流せしかバ。一箇も殺しはべらざりしかバ伊豆相模の漁夫まで這仁政を沾ひて感じ慕ぬはなかりけり。左右する程に冬も既に十一月中旬になりし時候有一朝瀧田なる義実主ハ猛可に蟇崎照文を召て告のたまふ我親兵衛を憶ふ故歟昨宵殊なる夢を見たり。譬バ大江親兵衛も今番の獣獵の隊に在り他皇國より獲らるべき暴虎を射て斃せしを引提て我に見すると思へバ忽焉と驚き覚けり。夢ハ五臓の煩ひより佛経にも世の果敢なきに譬て泡沫夢幻といへり。遮莫周禮に六夢の説あり。則其官を置て占夢をもて其吉凶を知ることも最故あり。然バ上古ハ天朝にもためしある。崇神天皇の即位四十八年の春正月天皇 崇神 則豊城命と活目尊に勅詔あて。各其見ぬる夢に縁りて天日嗣の大位を定めたまひしよし書紀に見えたり。

その他夢に由て吉凶ありしよし國史及諸書に載られしを枚挙るに遑あらず并に擬らへて示すにあらねど只虚夢とのみいふべからず虎ハ猛悪の獣人の残忍奸虐なるを。則虎狼野心といへバ親兵衛今なほ京師に在りて虎狼に等しき奸人に苦しめらるゝこともあるべき兆なるべき歟しらずや。夢寐といへども快らず因て我又思ふよしあり。親兵衛が安危を知んとて。間諜使を遣はしてこそ後暗き所行といはめ明々地に使をもて赤復調貢を献り。室町殿に請稟して親兵衛を召取らバ許さるゝことなからずや。と思へども又ヨヌく。資財を費すにあらざれバ行ひ易き所為なれバ我口親安房殿に如此せよといひしかバ海先稲村に赴きて。家老毎に悄地に告て他們も宜しかるべし。といはで左も右も計ひてよと赤他事もなく課られバ照文深く感服して。親兵衛が京師の安否を慮まで御心に掛させたまふる御慈孫とまうさ

ものの上やいべく。仰美りのひ奴。徑ふ稲村ふ参上りく。宜く計ひいむと答
稟ゝ退ぞく。いそぎく稲村の城ふ赴ぞく。則辰相清澄ふ老館の御意
箇様々々と件の一義を告く相譚ふ辰相も清澄も倶ふ感佩して異
議あゝぞ。恁まで敦ぞ御賢慮を。館の推辭とゆうや誘ゆ。稟上んとて。
隨即照文と共侶ふ義成主の身邊ふまゐりく。件の義を告まゐれば義成
徐ふ听果く。且感ー。且其欽び大々さうぞ。則答ゆふ。今兼ふ老館の
御賢慮ハ愚意も亦相同ど。嚮ふ又京師へ使を遣ーて。請く親兵衛を召
取ん欲とて。犬氏名ふ意見を問ひよ。毛野及自餘の六犬氏も皆只寛の一
字を是とーて。別議ゆければ默止せーふ。それよりーく五十日ゆまり。歴ぬる今
ぢく信ゆい必是故あるべ。然ば再度の使をもて。親兵衛を請稟へども。
性急とゆべくゝぞ。且陰ゆいたの一義ゆれども陽ゆい主上を首なり室町東

山の両公へ再度の調貢を獻る。忠信ハ我真面目ぞ。數千金も惜むふ
足ゝぞ。邈ふ唐山の故事と思ふふ。殷紂ハ犬戎の文王ハ羑里の囚ま
も。美女と數千の宝貨とりて。償ゆる例あり。今戰世と云とへども。那紂王
ゞ時ハ似ぞ。聖皇賢相上ふ在せば。管領の私議も亦ゆれざる所あらん。徒れば
這回も又五千金と瀕ーて京師へ使をまゐらせむ。十一郎ハ皿能還りてたの義を
老館へ稟まべ。大士名ふハ生く郊外ふ在り。然るを今召よ。そ告て再議ふ
及ぶべくもあゝぞ。老館の御意不ければ。他们も感服せざらんや。山獵果く
来ゆるを待く。告るとも遲ーとハいー。就く又一議あり。今番の使も別人ち
要ゆ。十一郎ハ歸國の後いまゞ久ーくゝれば最大義ふ思ふべけれど。亦復那
地へ赴ぞく。事よく計りく。親兵衛を相伴ふく来よか。と亦餘義もなし。君
命ふ照文ハ唯々とだく。額衝ゆ美りひとも。先度ハ正

使ふ親兵衛あり。又代四郎の帮助あり。あるとりく臣若も亦副使ふ失ふ。苛子崎の賊難京師の首尾も皆便宜を汲くいひ。今度い先度ふ弥増せる。特ふ大事の御使ふ短才浅慮の身單ゆく。数千金を齎しの。船雲海賊く殺禳ひ陸ゆい京家の禁錮を解て。親兵衛をわく還ふ。大任をよく仕くんや。千里の水行を幾十回往復仕りしとも。戸を辭ひまつるあるぞ。任重くして力足らぬを。知りて。仰ふ従ひまつりて。失あらば爭何ハせん。賢慮を仰ぎたるとおそるく勸解ける。義成ぢち。黙頭のひく。誠ふ其説も謂あり。其副使ゆる。何人を欲得遣を。六郎兵庫助ハ思ひ給ぎやと。問まく。両個の老毎ハ阿と応る。戸中ふ清澄一雲時沈吟て最愚按ゆいへども。今番又照文ふ仰付らる。京使の副ゆい田税戸賀九郎逸時。苫屋八郎景能て。ゆるほべくいひ。他若い曩ふ素藤ふ館山の城を拔まく。命を免れ逐電ゆく。浮浪孤獨の身を托ゆ。ゆ大江親兵衛の隊ふ隷く。素藤伏誅の日ふ軍功あり。あるとりて召復されて。本領安堵仕りゆ。只是仁の因ん義ん是若の故もいへ。親兵衛の安危ふ就て。他若骨を折知力を盡。照文の帮助ふ做りく。倶ふ成ゆりゆい。賢慮誰何と問まるれば。義成主ち頭。答ふく。我他若ゆを忘れゆ。六郎も同意る狡然ハ逸時も景能も。武藝拙くぞて。且思慮あり。親兵衛ゆい及ぶとも。別人ゆい優ゆ。相応くて。とふ応ふ照文も又稟さく。副二人ふいて。機ふ臨く。愈利ゆく。仰付さゆ。願へば義成主又頷く。宜ふ然ん孔子の言ゆ。三人行へば五吾師有り。其よ者を擇く従ふ。倶ふ衍恐ふ。那逸時景能い。鄙ふ直元若と倶ふ義通ふ従いく。七犬氏の人馬調煉の猟所ふ在ると既ふ久。早

く人を走らく。召来さて分付ん先這芝をとりたをゆふ折〻〻件の逆時景能。
御曹司の御使ふ立れて。猟所より参入りしく。その次えあり〻ぶ義成主。時の
便宜を撰びゆふと大〻〻るも。遣御逆時景能を縁頼へ召よるく。使の所以を聞
ゆふ。是則別義ふあるも義通君。昨日猟所の山路ゆく。料らも霊芝を得ゆひけり。
其ゆ火芝へ一根ゆ〻く十茎あり。疑ひもなく祥瑞なれば。憲覧ふ入れゆふと云両個の
使ふの義を舒く。霊芝を近習ふ逸興ゆ〻と義成いとも見ゆで。辰相清澄
ゆふ宣ふ。霊芝へ世ふ稀なるめ〻我是を憎むあるねど。約莫人の君る者。
漫ふ祥瑞を撰べば奸民屡奇を呈ふく。利禄を欲まるふ至ぶるゆ。在昔唐
山後漢の光武へ中興の時。年毎ふ祥瑞の多〻りを。皆退けく。賞せぎといふ。
後漢書 志ある君へ誰も徳と称ふべけれ。義通ぶ孝養の一端なるが霊
芝へ十一郎ふ預けん。老館ふ見せなりて。御用なくへ是も亦調貢の一種ふ備

ふべ。又六郎兵庫助へ件の一義を。戸賀九郎と八郎ふ云渡して。逆旅の准備を
いたゆもべく。猟所へ別人を遣して反命を致さもべ。この餘の所要へ箇様〻〻と。
言叮寧ふ命じゆべ。大家俱ふ言義して。打連立ぶ退りける。徒而辰相清澄へ
照文と俱ふ逸時と景能を別席ふ招ぶく退れて。今番又蛮崎照文を。京師へ
御使ふ遣さるふ。逆時と景能ふ副使を仰付らる。其故へ徒らと大江親
兵衛を償ふべ。事の趣を演ぶれば逆時景能義へ相教びて禀むゆ。臣ぞるへ。
曩ふ大江親兵衛の好意ふ憑りく。曾秘言の恥を雪むといへども。繞ふ附驥の
小功のみ繋るを思ひけり。徒る一大事の副使を奉りはへ一期の面目この上や
ゆ。縦去向ふ難義あるとも命を涯らふ仕まつん。相ふらるくいと異口同様ふ
言義して。躰く宿所へ退りけるあ故ふ辰相清澄へ則両個の青侍を逸
時景能の代とし。猛可ふ猟所へ遣して。遣即這二人をもく。直元と七犬士をも

と事の趣を告知して義通君へ僕のごく反命を果させけり小程ふ蜜崎照文の件の霊芝を伴當ふ持して瀧田へ立ち寄つ隨即義実主ふ見参して御本意の如く京へ遣さる御使を照文又奉りて逆時景能殿と俱ふ水路を那地へ赴くべしとある。館の仰及御答の間様々々又あの霊芝の御曹司の猟所の山路を得せめしん。あの義ハ亦箇様々々と都く那意を告まわせて躰く霊芝を見せられば義実主の教びふへうもあらぬ先其霊芝を見玉ふ。実ふ見一根ふして十莖あり。その第四莖と五莖と第十莖ハ短くて凋然と一く其色異へ故あふ哉百十數年の後の世ふ這祥瑞のあるも僅ふ徒へ少く者ハ偶然なる恨を悟るもあらんを天機ハ量知るべ難し這時誰ふ思ひ泊ん義実主ハ奇へとのみ稱く惜る心なくそ侭照文ふ返へ申ひけり然ば又姉真音音曳る單節ハ親兵衛代四郎の安危浅のみ思ひ不娯々在らけるふ老館の御慈愛ふよりて又照文逆時景能殿ハ京師へ使を奉り親兵衛を償取せの館の仰慈々ふ俗へ少知り相賀びて左ふ右も両館の御恩とふ俯て思ひ仰ぎまれば鹿野山の樹根巓も數ふ七浦の澳もとのうひと倶ふ稱く照文の宿所ふ到て主人の妻ふ対ふ日ふ必ふ来ふ日ふ問遥けた水路の行を労ひて且慰めけり小程ふ有司名ハ京師へ調貢の下知ふ及ぶ夜となく日となく急ぎ上ぶ僅ふ三四日ふ〆て東西咸整ひけり其件々ハ黄金五千両名刀五口柘弓三十張征箭五百幹鐵砲三十挺並ふ塩鴈五拾雙乾鯛五拾樫綿五百屯麻五百把是へあの日照文逆時景能ハ召れて君侯ふ見参義成則仰ふる旨あり其第一條ハ今番朝廷摂家並ふ室町東山殿へ進ふる貢物ハ犬士の姓氏勅許の朝恩ふ答奉るべき為ふく且大江親兵衛ふ歸東の暇を賜らんとて願ひ禀ふべ。あれども機ふ臨み変ふ応ぜる損益用捨あるべけれ胡意貢進の諸目録と呈書ハ相渡さる因て右筆大岸法六郎を。

十一郎等に従ひて。倶に京師へ遣え。上書啓状の諸文書。世話那地に届る。
の日。先づ時宜を覘ひ機に臨て。書して其を奉るべしと。素紙に花押と
墨印を。拓なること幾枚。照文に與へる。その夫辰相清澄相伯へ。貢物見参の
礼儀のごとく果しぬ。照文逸時景能に倶に退く。有司に黄金と種々の貢物私
用の米銭に至るまで。漸々に受合ふ。港口の舟積入れんとて。這三使に相従ふ
右筆大岸法六郎。並に騎兵十名。走卒奴隷二十餘名。夫役六十名。都て
一百名に近ふべし。恁而其通宵東西咸許ヨリ馬に駝して。終日洲崎の港
口へ出で。渡海の船に載せる程に。這三使の所親聚ひ来て見送るもの少からず。
登時照文逸時景能等の人々に告別して。主僕其暁天に齊一船に乗る
程に。折よく順風吹けば。舵工仍て纜を解き帆を揚て。西を投て走せける。
その日は十一月中氣のなりしに。是より僅に三四日を歴て。稲村の城門に着る

武蔵相模の方へ遣して。敵地の動静を探らせる。間諜兒両三名かへり来て。一
大事あり。と注進す。是に依て義成主。其兵毎を庭門より。縁頰の下に召よせて。
みづからその義を問ふ。腹心股肱の近臣五六名。左右に侍り。両家老辰相清
澄等。其次の間に伺候す。倶に其告をうち聞て。是則別義にあらず。管
領扇谷定正主。道節信乃毛野等の八犬士を酷く憎るよりして。其怨に
堪ざりけん。武蔵相模下總上野越後五箇國の大軍をもて。當家里見を伐ん
と議すと云。是則一朝の所以なり。事情を原るに。曩に定正の家臣根角
谷中二郎政木狐に魅されて。非罪の罪人河鯉孝嗣を。阿容々々と遁與せし
時。穴栗專作等と倶に虚氣に隨ひ。まぐ醒れば。疾く五十子の城に赴く。
那大刀自の事の顛末を。箇樣々々と。許りなく。定正聞て。いたく怒り。
べるるるねば。隨即其田馭蘭二に士卒幾名を従へ。服大刀自を迎へ

よとそ前面岡遣けるに谷中二が訴へ皆延の虚言あるを糺あらばれば馭蘭二
名は徒に五十子の城へかへるまで事偽々と告しに定正勃然として怒に堪ず原来谷
中二専作名は悄地に利をるゝあらんぞむ所を脱しるあらんぞむ所を
欺瞞め為の風を捕へ影を抱ぐごとく大刀自の事を訴く君を欺く罪軽からず那
身はゆゝし相従さる走卒奴隷に至るまで緊あく牢獄に閉籠て笠呂を中て招うさを
よと敦圉昏暴く下知あれば馭蘭二是を奉りく則谷中二専作名は結枳りて緊
あく拷問も時に谷中二専作其餘の郡兵も撻れく毒の覚る如くに思へば大刀自の
事不思議といふも餘りあり枕狸の所為ならん扨と思難る所に谷中二が苦しび
る聲戦かく陳ぬるを見て其田主安呂を止めく禀も美あほと所の那大刀自の
事いふも何ぞ偽を禀ぬ然れども主僕銷や失せん往方知ずとぞいふに就て
やう思く思惟れば倘是孝嗣に親しき友の狐を使ふ者あほ欺然くまぢ幻術を

行ふ者ぞ我毎を魅らく孝嗣を掠略くに走りくるゆゑあらんぞむ去らとく
我が罪饒まるべきにあらねども願ふは權且頭顱を假て放免児に做ゆるべ専
作並に郡兵名と俱に樹を伐り草を芟拂ふまく仇と孝嗣の往方を索ひく
摘捕く呈らん其事倘果しなばそのの折頭顱を召さるとも御賞罰の違に
あらざるべきの説を聴えあげく愚意を遂さゆゑと叫べば専作郡兵名も異
口同音ゆを陳ける馭蘭二是をうちゆく赦の日い笠呂を止め牢舎へ遣て却次の
日に至りく主君定正へ谷中二が情願箇様々と件の一条を申え上るに定正
頭を傾けて其条是にあらべ然れども事に假托く逃亡せば扶料りかたら權
且谷中二専作名と放免児に做もとも他名は果して願の如くよく其事を做
卒るまく宅眷を那身の代とく繫く牢舎に繫くべ開が中に郡兵奴隷の
單身ゆく妻もるく子もるに若い開が男女の胞弟兄扶小父小母を禁獄せよ事

文溪堂蔵

忽諸ふ志べくべとゐ弓貌ーて命ぜれい駁蘭二美の退出く。儀のごくふ執行ひく。
却谷中二と専作と隊の兵、毎の禁獄を饒ーて御諚恁々とのひ知せ且限ふふ
百日をのく。孝嗣を搦捕くまあ〜志べ。倘その功ゐ時い其身いけ〜ゑ宅番志。
連坐の罪免るべ〜べ。勉より。と言示ーゐ。皆其縛の索を解免ーて放免
児あ志ゐける。是ふより。谷中二専作い同罪ゐ走卒奴隷を分ち従へく。日
毎ふ出く。退途とく。孝嗣の在処を索るふいまだ毫も便宜を得ず左右ふ
程ふ夏い過く。秋も又八月の時候ふゐり〜べ谷中二们い孝嗣を緝捕の限り百
日ふ垂とゐるふ憂悶く。駁蘭二ふ就く。禀を義ゐ又百日の日延を願ふ駁蘭
二ゐ役柄ゐれいとそ谷中二ゐを慘刻も志ゐれ生平ゑ同氣相求めく。倶ふ孝嗣を
譖ちたる小人ゐれい諾ゐく。主君ふ執成禀志べ又百日の用捨あり。今茲の冬く
十二月を限りふ功を奏志べ。と分付ふ。是より〜て谷中二専作い二隊ゐれ暇

兵を領く。或い貌を寨一名を庚ーて武蔵相模伊豆信濃上野下野常陸下
總まで。約三四十里四方い漏を隈なく。孝嗣並ふ那幻術とよく志る者やあるとそ。
悄々地ふ穿鑿ゐ索さけるふ既ふ〜〜十月の盡まで。照験とゐるべ〜べ倶ふ五十子の
城ふかへ志ゐ。又近郊を求猶ゐ程ふ十一月の初旬ふ至りく。料らぬも墨田河の邊
ゆく。那餘類一人を搦捕りふけり。其故什麼とヨ尋ゐふ武蔵野ふ程遠ゐ奴那
穂北ゐ。落魄餘之七有種。今茲の夏四五月の時候八犬士ふ別れ後も。我
父氷垣殘三夏約の重病ふ拘ひらひく。妻の重戸共侶ふ一日も暇ゐろけ。看
病の劬労そのひゐく。九月中旬某の日ふ夏約い身故りけり。重戸ゐ哀悼いへゐ
ゆ〜ゑ安葬の事。七七の追薦ふ又幾許の日を過ーゐ。冬十月晦日ふ中陰稍果
ゐるべきの日有種い重戸ふ向ひく。曩ふ八犬士の徴れく安房へ赴行ーより。親の看
病ふ暇ゐ〜〜〜〜一〜びも安不ゐ。且故翁の病臥の時里見殿より人

蔭を賜りし義さへあれば。安房へ使を遣して八犬氏の人々が、翁の死去を告げやと思ふハ什麼と商量をなすに。重戸ハ敢異説あらぬ。そいたがせば有種ハ其次の日十月朔日ハ八犬士並ハ、大照文名ハ與べく消息二通を書寫め。且此二人情を准備ふ。老僕世智仇小オ二ハ。其十一月二日の朝いそが立て出し遣りけり。這世智仇小オ二ハ曩ハ大角現八の事あり。八犬士ハ相識られず。且心利たる者なれば有種ハの使を課せるハ胡意二人を用せしを。他見を憚る書翰なるハ他名略ゆく。不慮の急病あるとて。一人ハ先へいそ為ゆ。悠い心を用ひず。然ば世智仇小オ二ハ。倶ハ逆旅の准備をなす。其朝早天より。穂北の宿所を立出て。墨田河原まで来ふける程ハ。小オ二猛可ハ腹痛ふく堪ずして走り出るを。仇なるハ此の地方の賣津艇ハ公ゆく。蟻仇梨ハと喚做を者ハ世智仇ハ小父なれば。權且井里ハ立寓く。將息して癒べば亦復路をいそぐと。倶ハ梨ハ許赴く。事由を告ぐ。主人の老婆ハ。先小オ二を。懇ハ勧りて。地炕の邊ハ臥しめて。九茱を薦め湯を與ゑどもる程ハ。小オ二ハ下痢水瀉して圊舍へ暢ふと。ゆくゆく。昨宵首途の欽びハ朋輩ハ酒を沽せられ。去折喫過したる出ずゆんと云左右して。小オ二の腹痛水瀉い愈しかど。久くの日早く敢て下晡ハ。ゆくり時。主人梨ハ。賣津上よりかへり来る。老婆と共倡ハ。其の二客を抑慰めく。今よりも。くとも。三里ハ過ぎ。今宵ハ枉く這里ハ曉して。明日厚出く。ゆくとて。老婆ハ酒菜を買て来る。梨ハを酒と湯めて。倶ハ世智仇と小オ二ハ薦めけり。然れども小オ二ハ病後なれば。とく。ヨく沼喫まず。梨ハ世智仇叔姪ハ送ハ嗜む狂水なれば。献り酬れり喫程ハ。梨ハ。世智仇ハ安房へ使ハ立られし。と。ゆくとの所要を問ふ。世智仇ハ。醉ハ乗して。八犬士の上を告ふ。道節信乃を首ゆく。孰も勝り劣りなれば。武勇力藝箇様々々と。聲喋々

文溪堂藏

八犬傳九輯卷之二
やちう次
ぜんろう
○東海堂蔵

八犬傳九輯卷之二
小大次
せちう介
るー八
ぢ八つまり
○東海堂蔵

ゐく説誘るを小才二ハ傷痛くて只顧ふ目を注せ又其袂を掖るごとく悄地ふヨヌ
辯を制れども世智ハ尚曉得らず諄復〻唱りけり恁り一程ふ根角谷中二
穴栗専作いたの日も孝嗣の在処を穿知る便り欲得とて同罪放免の賂兵十五
六名を従へて終日遐途を徘徊ちつ其嘿昏ふ心ともるく主僕梨八の門邊を
過る程ふ折ふ家内ふ世智ハ犬士の姓名を倡て武勇を説誘る聲高や
ふ呼ふるを谷中二ハ訝りて俱ふ外面ふ窺聞ちつ。そのふりを知まく欲もるふ是
則犬山道節大塚信乃ハふ由縁ある者ふるべしと猜り疑る谷中二ハ合咲な
ぐ肚裏ふ思ふ様那奴ハ我索る河鯉孝嗣の支黨ふもぞとも那犬山道節犬
塚信乃犬阪毛野ハ曩ふ我君ふ怨して五十子の城を火攻ちける結城煉馬の残
黨ふ今那奴ふを搦捕て敲て其在処を知るとふへ必是我ハふ罪を償ふ足ら
ぬべしと思ふ心を賂兵ふも耳ふ示して両隊ふ分て専作ハ背門の方谷中二ハ門

邊より一度ふ吸と稠入て耳を串く聲苛高くやまれ嵯峨児正可ふ呼け扇谷殿の
御諚を稟て悪犬士の支黨を緝捕の頭人根角谷中二ハ穴栗専作ちふ在ふ家ふ
被れと喚れば驚ふ怕る〻世智ハ梨八老婆も共侶ふ跪く時酒醒て俱ふ云云と陳
べれども谷中二ハ分説を听く〻賂兵ふ下知て犇々と主客二名を結杙せり開
ぐ中ふ小才二ハ心早ふ者ふれば彼の緝捕氏のうち入りて一ふ闇ふ方ふ身を倚て壁ふ
落る処より働と推破り庇間ふ脱れ出て穂北を投て飛ぶ似ふ逃亡せり谷中
二専作賂兵ふ下知て世智ハ
と梨八ふ十ふを屡中させて只那道節信乃ふの在処を根穿り無欲の責
問ふ梨八夫婦ハ犬士をよくも知ねば只世智ハ左や右と頼陳ど
なりけれども谷中二敢実とせぬ両箇の約束あるを見出て賂兵ふ披負て撿ふ
果ては内ふ落鮎餘之七有種ハ犬士ふ贈る書翰あり且其書中ふ河鯉佐

太郎の政樹（又政木ト作る）大全孝嗣が石亀屋次郎太郎と共ニ結城の左右川老人（樹と木と通用）水の事と悼むるも見えず。又里見の家臣蜑崎十一郎照文と、大法師（寄也）る二通の謝書もありけれバ谷中二専作仁ら歡びぶべうもあらず。則その書翰を通を照据として苛鋭く世智仁と拷問せらるゝ世智仁遂ニ脱る路なく有種の素生と首ゆ。道節信乃仁の八犬士ハ曩ニ久しく落魄の家ニ寓居して復讎の事あり。後里見殿ニ徵れて皆共侶ニ安房へ赴くの。又河鯉の政木大全孝嗣ハ曩ニ死刑ニ及び折大江親兵衛ニ辯迫して其邦助と泣くれ。則伴れて上總ニ到りて素藤と征伐の日ニ孝嗣も軍功あり。又親兵衛ニ伴れて次郎太郎ニと吸傚も浮浪人と倶ニ結城へ赴く路の程左右川橋ゆく憶らるゝ。敵の鐵砲ニ斃陸されて死活を知ざるゝと云隊守る那噂ニ招るして又ゆゑ。小可い老僕小才ニを吸傚る者と倶ニ安房へ使ニ立られしニ。その邊ゆく小才ニ腹病發して路去ゆゑ小可ら

小父と呼る。這梨ハ許立ちて。特息の為ニ日と銷せ。然バ那犬士のゆ孝嗣とらゝゆゆ。小父ハ小可い聊も干渉らず。いで饒させゆゝと勸解るゝ谷中二ち皆ゝ。原来其小才二奴とも皆一細ニ捕るべゝニ知ざして走くゝられバ其奴穂北へ逃かへそ。告ゆゝ有種ハ逃亡ゝ。疾推蒐て捕ん。とらゝ先世智仁ハ穂北の光景と尋向ふ世智仁答て然ンハ一邑約二百餘宅あり皆豊嶋の殘黨ゆ。莊客ゆゝも武藝を嗜て有種のゆニ屬ざるゝ。曩ニ犬山道節の復讎と帮助る本事況知召れゝゆ。とられて谷中二躊躇て。現ゝゝんゆゝ今這小勢とそ。推寄るとも效るけん一圓五十子へ立ゝゆ。是ゆゝの事の趣を申え上く御下知ニ依らゝとゝ。専作諸ゝて然ゝゝバ雑兵四五名と留在せそ地方の長を召せそゆの家と守らせんゝニ送り居る人々ハ発ゝゝの受をゝゝゝよと宣示して谷中二と倶ニ十個許の雑兵仁ハ世智仁と梨八夫婦を牽立ちて。蕉火ニ路を照して五十子の城を投てゝゝゝ。有恁一程ニ小才

二。その甲夜の間に穂北へかゑる来て。則東人有種夫婦に中途の禍事固様々々と世智介。小父梨八の宿所也。扇谷家の縅捕の頭人根角谷中二穴栗専作と喚做る一隊約十七八名の猛者の為に搦捕られ。その故に固様々々。郷に黒土田河の邊也。小才二が腹の病着發り。故に世智介の小父梨八許立よりく。權且將息あるる程に世智介。曾待酒の醉に乗せ。ロの外。八犬士のあまでも説誘りて其聲洩れく。那禍鬼に遇はと云其事の槩略を端々告知るに。有種つらくち聞て。亘戸を左へ右へ。曼義に犬山主の復讐言の後那討隊の寄や来ぬんと。犬士の毎故翁と俱に敵を待かども。事洩ざれば安くりーに今番憑に八犬士の安否を訪まく欲為。我使介より事發覚れて苦害立地に及ぶ。是則天之命。討隊向ひ。矢種の法。防戦に免れくい家に火を放て腹を斫ん今ゆう怕ることと慌ると亘戸の椎林ゆく。恁思欲もるに男士の本性理に依れども死生の易く生の難う憶に其

根角谷中二とやらン。一隊僅に十七八名。その夜今宵推寄せ来べもあらじ。他ならば必五十子へ還るとまで。勢かゝとし従へく。出更と来るべき。豆の朝所に。豫知せる如。十總猩嶋の山院。住持の法印。奴家が先妣の弟也。出家に仮げ。義侠あり。と豫ゆ。據ら且境内の廣とい。這里人を送もるく。伴へ。わく憑とも。必や舎藏れん。權且那里に時を俟て。恥を雪る便直も。ゆう。慌りて戰死ぬるこの。勇士の奥言に。倣ゆう。と詞雄々しく諫ども。有種は沈吟。頭を拾げ領て。然いろれば其理あり。今我躬方に一百餘名。敵に二倍五倍せん。寡を以て衆に勝とも。躬方に戰死ぬるぎりんや。友を殺して名を成もとは。仁人義士の為ざる所。現立退くに。あらざるべ。因て憶に。今我里人と共。侶に徑に安房へ赴て。八犬士に憑。里見殿に仕へ。易らぶべけれども。大敵寄もちと知りぬ。戰ぎて退る。恥を思ぞ阿容々。今ゆう安房へ。いれんや。一圓下總へ退て後に。亦主張せん。爲よ小才二。暗號の貝を吹鳴ら。里人ども。疾集合を

やとふを小オ二ちろ〻そて柱ゐ吊る法螺撥合て走り岩く吹立る〻事の火急を徇
知せれい穂北一郷の荘客百十數名ゐ竹槍連枷を引提て時を移さず走
アとあり皆有種ゐ書院の廣庭へ碁石の像く来會ーゐ有種縁頰ゐ立て那凶
変を告知せ且敵の英氣を避んゐ與ゐ一圓ゐ方の衆人を伴ゐ下總ゐ某の山院へ
いるんと思ゐ事情を詞急迫ーく說示せゐ大家ゐ〻ちろ數〻ゐ中ゐ里の故老両
三名詞ひとーく答る中ゐ故東人氷垣ゐ自の時より我们ゐ皆御庇ゐ各宅養
ふゐ今日ゐ至れるゐ恁る時誰ゐ異說せん死ることも生ることも東人の隨意ゐ〻べ〻ゐ
背ゐ〻ちろんやとゐへゐ大家異口同様ゐ別說ゐーとゐ答ける有種是をうち空て歩ゐ
各各ゐ早く宿所ゐ走りかへそ要用の家伏財宝ゐ或ゐ馬ゐ駝ゐ或ゐ枕ゐ揖く皆共
伴ゐ今宵の中ゐ千住河原へ出べ那河岸ゐ我ゐ船ゐ大平馱二艘あり それゆく
足るべゐゐあれい他の船ゐ載ることも便直ゐ〻その船の價を船主ゐ取ーゐ或ゐ又

馬ゐ人々ゐ駝ーて歩行ゐ〻ちろ〻ゐ夜も明ゐ五十子ゐ〻ちろ討隊の大勢推寄
せ来べ〻脱落ゐ〻ゐとゐそ〻ーて准備の金二百両ゐ〻ちろ件の故老ゐ〻ちろ遮與
ゐ〻ーゐ大家孰ゐ感せざるべゐ相ゐ〻ちろそゐと応も果ゐ共伴ゐ身を起ーゐ外ゐ出て
宿所を投て走りける登時亦有種ゐ小オ二と家の農人の心利く迅行ゐ〻四五名
急ゐ召ゐ寄ゐ〻ちろ若们ゐ今ゐ家伏を河原へ運出て我ゐ船ゐ載早ゐ河の
邊ゐ遠見ーて五十子ゐれ討隊の大勢来ゐ〻を見ゐ早くゐ
穂北へ走り巡ゐ〻里の家毎ゐ火を放て洞ゐ紛れ立去て歩行ゐ〻我投ゐ下總ゐ
る那山院へ尋ゐ〻来ゐ俄後れて敵の為ゐ虜ゐ〻れて後悔ゐ〻ゐ勉ゐ〻ゐ敬ゐ〻ゐ
下總ゐ〻の路費を取ゐ〻ゐ配早く定ーゐ〻ゐ是ゐ〻ゐ家伏をとり出ゐ重戸ゐ指揮ゐ
従ゐ〻ゐる一家児の奴婢ゐと虚ゐ〻ゐ者ゐ〻ゐ一雲時の程ゐ馬ゐ駝ゐ或ゐ長韓櫃ゐ藏
ゐ式ゐ遊ゐ裏ゐ枕ゐ櫃て千住河原へ遣ゐ出ゐ約莫ゐ二時有餘ゐーて要用の什物ゐ

皆大平駄の為船二艘に載せ。小程に這穂北なる荘客等も各宅着と共に家伜を
尽く来て船に載るとも。特に夜長に時候なれば。当時あの河邊に曠々たる郊原も
叢立たる枯葦あるのみ。人煙猶遠ければ足を知る者なしけり。既に七日の一村落の里
人も東西咸尽く果てゝ流に従ふ者は笠高を操り歩行く者は馬を牽て。有種重
戸奴婢と倶に下總を投ていそげり。中に小才二と有種の家の農人四五名は河の前
面に立明りて敵の討隊の寄せ来るを今挙くと候程もなく。夜は皎々と明ける話
分両頭。當晩根角谷中二兎栗専作の賊兵に世智介と梨八夫婦を牽せて路
次をいそぐかども程近くれば丑三刻時候に五十子の城に入り来る。躯を其田駅蘭二の
宿所に寄せ。慌忙く敵に喚覚して則駅蘭二に那有種が二通の書翰を手に。
事の槩略を告ていはく。鄙に在下総に里堅田河の邊なる賣津船公蟻屋梨八が宿
所也。穂北の郷士落鮎餘之七有種と喚做す者の老僕世智介並に梨八夫婦を

捕捉に就て。河鯉孝嗣が住方も又那大山道節大塚信乃犬阪毛野等八個の
悪党の在処も事詳に知れり。然が當夏前回岡の法場也。河鯉孝嗣を掠奪
す幻術児八元自道節等が伏家の悪少年犬江親兵衛と喚做す者と云世智介
が招ずに在処を敵に皆是仕へ里見に在。獨孝嗣が存亡詳ならねども他い
水馬水技をよく表れば入水をもとも溺れず。那親兵衛と共伍に仕て安房に在り
欲是も亦知るべくして却那落鮎有種は道節信乃等を相資てあの春當城に乱妨
を企る逆賊の一人也。下の五人一百餘名と倶に穂北の荘に在。皆是豊嶋信盛の残
黨なり。其筆を知りて徑に穂北へ打向て捕まく思へども我繞る隊
一百有餘の強敵を拉んと易くねば惴る心を推鎮めそいそぐかの山路
是等の趣を言上あらば一期の幸ひ御執成をねがはるいくぐくと卑下慢心鼻蟲
ゆゝしく説誇れば駅蘭二聞て其書を閲して。且今宵の挿を巻言と大さるべ

猛ふ獄吏を召よせて。世智介と利ふ八夫婦と。牢獄へ遣ーるべき程ふ。堺の鷄の
歎鳴く。朝霜白く天へ明け。徒而其田駅蘭二ハ早天より出仕ーて。則主君定
正ふ有種が書を呈覽ーて。根角谷中二穴栗専作们が大功の事の顛末吟
つ。隨ふ漏をとゞく。生拘世智介梨八夫婦のる及道節信乃ゟの八犬士の在処の
且河鯉孝嗣の事又落鮎有種の事首より尾まで。谷中二専作们が朝心の
趣を言詳ふ告ーゞ。定正歡び氣色ふ見えて。則駅蘭二ふ命まさ。根角谷
中二穴栗専作们に。孝嗣を捕ふぎとへども。其往方を窄鑿ゞ。且逆
賊道ゞ即信乃毛野ゟの支黨さる。穂北の郷士落鮎有種が老僕世智介並ふ
世智介が小父蟻屋梨八夫婦を。昨宵墨田河の邊ゆく。搦捕ぐ呈ーゝ。
其功莫大ぢを。他ゟ一隊の舊罪を皆悉赦免せん。職禄故の如くする
べ。就て他ゟゞ代て。禁獄ある宅眷親族も。饒ーゆーて宿所へ還ーね。そは

よりも猶急ぐ。穴ハ逆徒有種を討隊の一ゟ。今日穂北へ緝捕使を。駅蘭二
汝と谷中二を。両頭人として。穴栗専作を軍監とせん。迅兵三百名を。従へ早く
穂北へ打向て。一人も漏さぎ。搦捕りね。時後れゞ逃や亡るんとゝ。せとにてぞ。駅
蘭二ハ旨を。ゟく退て。有司と相共ふ谷中二専作们を召よせて。舊罪赦免の
恩命と。有種を討隊の頭人さ。ゆべーとある。君命を云渡せゞ。谷中二専作隊の兵
迨天へも升る心地ーて。肩を尖ら。肱を張り。俱ふ専作が宿所ふ集合て。先
武具をゞ整へ。仆程ふ。其田駅蘭二ハ。猛可ふ士卒三百名を召聚へて。人
馬飽まぐ。戰飯を喫せ。馬ふヨヲく豆草を飼て。谷中二専作ゟと俱ふ
是を領て。五十子の城を。ゆーハ辰牌の初刻ゞ。連りふ路次ぞ。ーらども。
五十子より穂北迄。阪東路二四十里一里の程ゞ既ふ已の五刻ふ。ゆーー時候
稍千住河をぞ渡る程ふ。忽地穂北の方ふ丁やく。黒烟天ふ冲り。猛火焔々

と燃升るを。馭蘭二八谷中二專作ると俱ふ前面遥ふ瞻仰く。原来逆徒の
自焼して逃亡るゆえあらんぞ。捕ふ漏しそ兵毎と喚りつ馬ふ拍れく。驀直ふ
走らつ。穂北の荘ふゆそ見れば一聚落の白屋数ともなく。皆火の被る反隈も
あらねば輒くかうちも入られぜ半分焼落く後ふ士卒を找く。俱ふ打入て検ふ。
自焼の屍骸ハ一箇もあらぜ只近村の荘客ども。その火を滅禁んとそ。遐途より走
て聚りて。馭蘭二八谷中二ぞハ有種ども支黨ども。或ハ所伏せ毆倒して。矢場ふ
索と被る者二三十名ありしかば。その餘ハ怕れて逃去りけり。その挙や定正里見を怨て。
竟ふ水陸両路の大軍を起り。是其事の張本欲分教あり。蠻觸戰場呉
魏似蝸牛角上誰祈風。乱れ蘆ハ治れる江のかろ多り。角ゆも渡せ両國の
橋。その詩謌の意を知まく欲せば下回より次々ぞ。解分るを聽ねかし。

南總里見八犬傳第九輯巻之三十一終